

国立民族学博物館の収蔵品 ⑤4

# 女工と托鉢僧



「女工と托鉢僧」国立民族学博物館、東南アジア展示場

この展示には、ちょっとしたストーリーがある。舞台はタイの農村だ。早朝、若い女性がバイクで出勤する途中、田んぼを抜ける小道で托鉢僧とすれ違うことになった。上座部仏教社会では、毎朝僧が食べ物求めてこうして家々を回る。女性は遅刻しそうで急いでいるのだが、バイクを止めて道を譲った、というストーリーだ。

民族学博物館が世界の民族文化を紹介することにその存在意義があるとすれば、紹介する民族の文化的特徴を明確に示すモノを中心に展

示が構成されるのはしかたのないことのように思われる。東南アジア展示場で最初の生業セクションは、平地での稲作や山地での焼畑、河川での漁ろう、狩猟採集など、タイに近代化の波が押し寄せる以前の、一九七〇年代前後に収集されたモノばかりを展示している。それらは当時、タイのどこでも簡単に手に入る日用品だったのだが、現在は国立博物館にでも行かないかぎり、見ることでできない文化財になっている。

これはこれで意義深い展示だと思うが、一方で誤解を招くおそれもある。確かにかつてのタイは米を多く輸出し、農業国として知られていた。しかし現在は、自動車、コンピューター、機械などが輸出品の上位にあり、工業国といってもいい。農業は今でもおこなわれているが、木製や竹製の伝統的な農具は、鉄製やプラスチック製の工業製品に入れ替わっている。こうなると美しい犁や鎌ばかりを紹介する展示は、現在のタイ文化を反映していないともいえる。国立民族学博物館を訪れるタイ人観光客のなかには、こうした自国の展示を好ましくないと考える人もいる。

少しでも現代的な要素を採り入れようと考えたのがこの展示である。一九九〇年代以降、タイの農村部に多くの輸出向け工業団地ができた。そこで働く若い女性たちが工場に勤めて最初にローンを組んで買うのがバイクである。なかでもタイホンダ製「ドリーム」は、日本で「カブ」として親しまれていたもので、値段は少し高いのだが、運転がしやすく、なにより故障しないというので人気があった。

かつて農村では、若い女性が一人で村外へ出かけることは難しかった。近くの市場へ行くにも男性のエスコートを必要とした。しかしバイクを手に入れると、終業後や休みの日に、友人たちと都市へ遊びに行けるようになる。彼女たちにとってバイクは自由や近代性の象徴であり、まさに「ドリーム(夢)」なのだ。

展示のなかの女工はいったんバイクを降りて道を譲ることで、托鉢僧に心からの敬意を表している。タイの若者は都市生活にあこがれる一方、仏教への信仰心を失ってはいない。伝統と近代が共存しているのが、現在のタイの姿である。

(平井京之介)